

地域の歴史③「近世」

本校蔵「絹村郷土誌」（明治44年＝1911年）によると、元禄9年（1696年）、それまで下野国河内郡に属し「和田の庄結城郷」と呼ばれていた『延島』・『延島新田』・『田川』、下総国結城郡に属し「小山の庄高椅郷」と呼ばれていた『高椅』、同じく結城郡に属し「小山の庄結城郷」と呼ばれていた『中河原』、結城郡に属し「小山の庄結城本郷」と呼ばれていた『梁』・『中島』、葛飾郡に属し「小山の庄結城郷」と呼ばれていた『福良』の合わせて8つの大字が下野国都賀郡に編入されました。その大部分は旗本領だったようです。

江戸時代の陸上交通では、結城から薬師寺、多功へと通じる「日光東往還」が、学区の西側を通っています。「日光東往還」は、日光東照宮参詣のためにつくられた日光街道の脇往還で、参詣目的のほかに周辺大名の参勤交代や物資の輸送のほか、一般庶民にも利用されました。別名を「関宿通多功道」とも呼ばれ、水戸街道の小金宿～我孫子宿間の追分と日光街道の石橋宿～雀宮宿間の追分を結んでいました。その道程は20里34町（約82キロメートル）あり、途中に関宿や結城といった城下町があり、宿場が10宿ありました。

江戸時代の水上交通では、内陸部の河川も物資の輸送に利用され、学区内を流れる鬼怒川や田川も利用されました。



田川の流れ



旧日光東往還（現在の県道結城石橋線）



高椅神社の楼門は、江戸時代中期の明和7年（1770年）に結城城主であった水野氏の寄進により再建されたものです。完成までに16年の歳月と延べ3909人の人夫が動員されたといわれています。建物は、幅3間の2階建てで唐破風の入母屋づくりです。1階は、扉がなく正面の両脇には右大臣と左大臣との隨身をまつています。2階の建物の周りには、高欄がめぐらされています。柱は中央の2本が通し柱となっています。屋根はもともとは茅葺きでしたが、現在は鉄板葺きになっています。

建物のいたるところに装飾彫刻が施され、全体的に力強く安定感もあり、典型的な江戸時代中期の建築様式の楼門として、栃木県の有形文化財に指定されています。



現在、楼門は修理中です